

阪神・淡路大震災から 20 年

### KOBE 市民と NGO フォーラム 第三部

※発言者の名前が分からない場合は〇〇と表示してあります。全ての方に確認が取れておりませんので、ご了承ください。

頼政：そろそろ時間になりましたので、皆さま、前の方に来ていただきまして、第三部をこれから始めていきたいと思えます。

第三部ではこちらの木の絵を使い、会場を動き回りながらキーワードを書きつつ進めていきたいと思っております。開始に際しまして、もう一人の司会を紹介したいと思います。

入福：学生の時に足湯隊で活動し、今は病院で働いております、入福です。今から司会をさせていただきます。

宮本：第一部、第二部を踏まえていただいて出た中身からでも、またそれ以外からでも、自身が伝えたいこと、大事なことだと思うことを書いていただきたいと思います。書いていただくものとして、六甲アイランド高校の美術部の方に花、モグラ、葉っぱ、木の実など色々な形の紙を用意していただきました。葉っぱにしても、緑の若葉や落ち葉などもありますので、青々と実っている葉っぱなのか、土をふくよかにしていく落ち葉なのか、このメッセージは何にあたるのだろうか、といったことも考えていただくと、面白い結果になると思えますので、よろしくお願いいたします。

頼政：震災 21 年目からの時代を担っていく人たちに向けて、キーワードを紙に記入する時間を持ちたいと思えます。黒いペンで書いていただければと思えます。どんどん書いてください。

【メッセージが会場前方に貼られている木の絵に貼られていく】

頼政：ちょっと質問をしていきたいと思えます。この「個の選択」という意味は何でしょうか？

〇〇：長田区でケアマネージャーをしています。ここ 20 年間長田区でお仕事をさせていただいておりますが、高齢者の一人暮らし・独居という形態が大量に発生しているのを見ると、孤立傾向が社会全般に進んでいると思えます。支えあいの意識は高まってはいるが、孤立の量がそれよりも多く、追いついていないと思えます。そこから、支えてもらうということも選択してもらうことが必要なのではないか、と

いうことを考え、今後、個人がどういう選択をするのかということが大事なのではないかということを書きました。

入福：「不思議な雑多さ」とありますが、この意味を教えてください。

〇〇：防災の活動を神戸のある町でさせていただいております。地域には数えきれないくらいの団体があります。例えば子供会や祭りの会など、たくさんありますが、そこに携わっている中で分かってくるのが、自衛隊や消防や警察のように、ひとつのルールに決めたがる団体が存在する一方で、地域での対立の構図や、裏自治会の様な存在というたくさんの人がいるという現実です。しかしまた、こんな地域でもいざという時には不思議と固まるんだよね、という声もある。それで「不思議な雑多さ」、と書きました。

頼政：「子どもの笑顔」と書かれた方。どうして用紙を木の実にしたのですか？

〇〇：花でも良かったのですが、実になって、それがまた誰かの種になればいいな、ということでその場所に木の実の紙で書かせてもらいました。

頼政：もう一人、「笑顔」と書いた方がいらっしゃいますね。これはどうでしょうか？

〇〇：東日本大震災の被災地で、ボランティアの笑顔に助けられた、ということを知り、笑顔で花が咲いたようだな、と感じたので花にしました。

頼政：東北から来ていただいたゲストの方にどんなことを書いたのか、聞いてみましょう。

楡井：葉っぱに「一緒に」と書きました。なんでも一緒にやったほうがいい。一緒に何かをやる中で、個々人が色々な部分で自身の色を出していけたらいいな、ということをお伝えたくて葉っぱにしました。

頼政：石塚さんはどうでしょうか？

石塚：「覚悟の連鎖」と書きました。第二部で鈴木さんからも話がありましたが、そういった覚悟がつながっていくこと。自分のスタンスとしても大切にしていきたいという意味も含め、覚悟の連鎖と書きました。

頼政：覚悟と書かれた方がもう一人いらっしゃいますね。こちらはどういう意味でしょう

か？

〇〇：現場でおばあちゃんの話聞いて、そのつぶやきを誰かにつないでいかなければいけない、という思いがあった。つぶやきを聞く時は漠然と聞いてしまうこともあるけれど、つぶやきという形でそのおばあちゃんの思いを受け取る時に覚悟をしなければ聞き逃してしまうことがあるのではないか。そこから、各現場でも覚悟を持っていかなければいけないと思いました。覚悟に根ざした活動という根っこから栄養をもらって、つぶやきが葉っぱとなるという思いを込めてかかせてもらいました。

頼政：他に東北からこられた方で発表してくださる方はいらっしゃいますか？

〇〇：昨日、仙台空港から飛んで参りました。神戸は二回目ですが、去年の2月に松陰高校の方とのつながりもあり、神戸に親近感もあって、1.17の時は東北から黙祷させていただきました。ニュースを見ていて、震災というのがどれほどの威力があり、どれほどの被災があったのかを思い知らされた。

4つほど用紙に書いたが、特に『ありがとう』と『大好き』ということ伝えていくことを大切にしています。南三陸町で語り部をしていた高校3年生の女の子が、亡くなった塾の講師の方に「ありがとう」が言えなかったことを後悔している、ということ聞いて、私も「ありがとう」と「大好き」を伝えることを大切にしています。

頼政：お友達の鈴木さんはいかがですか？

鈴木：私はそんなに枚数は貼っていませんが、リスの紙に「休む時は休む」と書きました。今、私は福島出身で大学生をしているが、震災についてどうやって伝えていくのかを考えている。伝える側が疲れていては駄目で、伝えていくことを継続するためには休むことも大事なことだと思い、忘れずに伝えていくという意味も込めて、リスの冬眠になぞらえて書きました。

頼政：皆さんもし質問があれば、お願いします。清水さんはいかがですか？

清水：私は二つ書かせてもらいました。一つは「縁」。震災によってそれを失うこともあるが、プラスの面を考えると、震災があつてボランティアさんに会えたり、KOBEという街に会えたりもしました。

もうひとつは「支援」と、これは少しマイナスの意味も含めて茶色い葉っぱに書かせてもらいました。災害がある度に支援があるが、時間が経つにつれてその支援が新たな問題を生んだりもしてしまう。支援が葉っぱになって落ち葉になる。それが栄養に

なってまた葉になるというサイクルがあると思って、書きました。

入福：蝶々に「はじめること」と書かれていたんですが、これはどなたでしょう？

〇〇：僕は高校一年生だけど、震災から 20 年経って、大学生の先輩や社会人の方が活動をされているのを見て、そういう活動の一番最初の形は「始めること」、ということを感じています。「始めること」という大事なキーワードを蝶々にすることによって、それがまたいろんなところに波及していくのだろうな、という思いを込めました。

頼政：「踏み出す勇気」とありますが、これはどういった意味でしょう？

〇〇：ボランティアをするとき、どうしよう、やろうかな、やめようかな、となると思うが、その「踏み出す勇気」というのが最初の元になるから、それをきっかけとして、ひよことして第 1 歩を踏み出せばいいかな、と思いその紙に書きました。

頼政：質問に、若者との違いは何か、という質問がありますが、これにどなたか答えていただけの方があればお話をお聞きしたいと思います。今の若いものは…という前置きはいらない、という意見もあります（笑）。

サン：質問です。「支援」というキーワードで、支援してほしい、支援する、というのはどういう支援なのか具体的なところを知りたい。

頼政：「支援」と落ち葉にあります、もう少し詳しく聞きたいということなので、記入いただいた方のお話を聞いてみましょう。

清水：本当はもぐらで書きたかった。ただ、支援に終わりが無い、ということで茶色い葉っぱにしました。支援も新しい支援が生まれていくと思うのですが、時が経つにつれて支援があることで問題になってしまうこともあると思って、支援とはただ明るい感じではないのか、と思って書きました。

頼政：第一部で「ボランティアは小さい声を聞いて広げる存在」とあるが、それは本当に出来ているのか、という質問があります。

〇〇：東北の話で、まもなく発生から 4 年になってしまうが、現在も避難生活をしている人がまだまだいる。仮設に住んでいる人であっても、元々住んでいた所から全然知らない所へ移っていったため、コミュニティが成り立っていないということも聞いてい

る。避難者を受け入れるということは、「こういうことがあって、こう思ったんだ」という話を聴く、ということが大事なんじゃないか、と思ってそのテーマにしました。

頼政：もう一つ。印象に残った話は伝えられるが、そうではない話は伝えられないこともあるんじゃないか、そういうときはどうしたらいいのか、という質問もあります。

〇〇：小学校 4 年生の時に震災があったが、身近な人間に共有し合う、ということ。何人かの友人と 1. 1 7 の時に東遊園地に行ったが、そのように複数人で共有していけば、いつかたとえ震災を知らない世代でも後世に伝えていかなければいけない、という考えも出てくる。そうしたことを積み重ねていくことで形になるんじゃないか。私の書いた「命」という紙は自分の命を自分で守る、さらに自分の周りの命も守る、ということも大切だと思って書きました。

頼政：「世代間交流」と書かれた方、解説をお願いします。

白井：神戸新聞などを読んでみると、復興住宅で契約が切れたという話がよく出てくる。そういう話を聞くと、その世代で震災の話が終わってしまうのかな、と思ってしまいます。そういう意味で、「世代間交流」と書いた。また、「運動」というものを考えたときに、市民運動と共に、高齢者の方々に対する運動も大事、という意味をかけて「運動」と書きました。

頼政：「災害」と書いてありますが、これはどういった意味でしょう？

〇〇：僕が落ち葉に「災害」と書いたのは、災害を通して絆や何か発見が起きたと新聞などで目にするんだけど、災害から何かを見出すって、日本独自じゃないかなと思ったからです。災害を通して何かを発見できるのは、日本というものが災害によく遭う所だからで、そうした災害から多くを発見し、様々なものを繋いでいくことができる。それで、落ち葉にしました。

〇〇：真ん中のところに「個の選択」とあるのが目についた。孤独の個って寂しいイメージだけど、ただ最終的に決めるのはいつも個であって、なにかイメージしやすい言葉だなと思いました。

村井：すみません、半分ちょっと疲れています。孫がももかというので、桃を探したけど、なかったのでも洋ナシにしました。そよぎとかれんという孫もいます。阪神・淡路大震災のときは靴を作っていました。「個を大事に」という意味で書きました。

日本列島は、弧になっていて沖縄とも繋がって、インドネシアとも繋がっていた。沖縄とインドネシアは漁法が似ていると言われ、その漁は人々が協力しないとできないと言われている。それらの地域では、陸の風にそよがれると賢い人になると言われていて、海にそよがれると優しい人になると言われている。現代では、たとえ海に住んでいるといっても、そこで以前助けあって生きてきたことを知ってはいるのだけど、人は海から離れていっている。ところが、三陸の「おもえ」という場所は、いち早く海に戻ってきた人たちです。周囲の人たちからも、サルみたいな人がいると言われている場所です。これらのことを、改めて、風にそよがれて、考えてみたいなと思っています。

入福：ここに気になる蝶々があるのですが、これはどうでしょうか？

〇〇：今、日本の23県くらいに友達ができた。でも、もっと友達を作るんだったら、もっと飛び立っていかないといけない。これからもっと飛び立って友達つくっていかうということで、蝶々に「日本全国に友達を作る」と書きました。

村井：それ、是非やろうよ。覚悟の連鎖で繋げていこうよ。各都道府県に支援者がいて、それを繋いで動いたこともあった。別にそのときは覚悟というものを意識してた訳じゃないけど。

頼政：「繋がり」、「ネットワーク力」とあります。さきほどの第一部、第二部で、つながりのニュアンスが違うという大人の見方もありましたが、どうですか？

〇〇：私は、震災のとき九州にいたのですが、吸収力が違うのかなと思います。ドイツに研修にいったとき、色々な情報をお互いに収集していて、友達が全国にいたらいいなと思った。

頼政：若者はネットワークを創ろうとしている訳ですね。「苦労の先のつながり」という表現もありますね。

〇〇：僕は、つながりとかネットワークという言葉があまり好きじゃない。今はLINEとか何とかで、簡単に「つながれる」感じがする。でも、本当の「つながり」は、簡単なものじゃなくて、苦労の末にあるものじゃないかな。今僕はすごく不便な山奥に通っているんですけど、僕たち若者が行ったら、すごく目をきらきらして見てくれる。大変さの先にある「つながり」は、裏切らないと思っている。そうやって、創っていくのが本当の「つながり」、絆じゃないかなと思っています。

頼政：たしかに、知らない人とも繋がれるツールはたくさんありますね。僕の個人的な意見として、意外に若い人が **facebook** をやっていなくて、40代くらいが多い気がするんですけど、どうですか？（笑）。

〇〇：つい最近、街角の79歳のおばちゃんにインタビューしたんですけど、タバコを売っていて、150種類くらいの商品を売っている。若い人たちに合わせているのが、そのおばちゃん、上の世代の人たちも学んで変えようとしている人もいるんだな、と気付かされた次第です。

〇〇：すみません、遅れて来ました。第一部の1班の模造紙に、「つながるのがこわい」というのがあるんですけど、怖くないつながりがいいなと思いました。日本でも、和をもって尊しという考え方と、違う人がいると何か安心できない感じもあって、つながるってことが怖さもあるっていう感覚がなければ、駄目なのかなと思いました。

〇〇：「苦勞の末のつながり」って本当に名言で、**facebook** やめようかなと思うんだけど。私は神戸の震災で継続できなかったという反省があります。20年目にして、区切りをつけよう、過去のことにしようと思ったけど、さっきの言葉でやっぱりやめて、つながっていかうと思います。

〇〇：私も、**facebook** を使う方なんですけど、自分の考えを出し続けると、当然そこに反発とかも受けたりする。反対に、自分に賛同する人も集まってくる。同じ志を持っている人たちが集まってくる。自分が動かないと、やっぱり苦勞しないと拡がったり、つながったりしないなと思う。

〇〇：僕が高いところに書いた若葉のヤツ、つながり、ネットワークはすごく共感するが、「苦勞の先にあるつながり」というのも、僕は色々な思いがある。しばらく連絡を取ってなかった人に久々にどうしてる？って連絡がしたいとき、つながった後だけ嫌われたら怖い、という思いもある。僕は本当に「つながる」というのは人それぞれかたちがあっていいと思っていて、人それぞれを尊重することが大切だと思っている。震災の教訓云々と言われるけれど、すごく感じているのは、上の人間は何もしてくれなかったということ。僕が訴えたいのは、防災だけではなく、どういう社会、どういう地域を造っていきたいのかという議論がどれだけなされているのかということ。清水さんに後で聞こうかどうか迷っていたんですけど、東北に行くことだけが支援なのか、つながりということも含めて、何をもって支援というのか。支援は終わりのないサイクルということ、支援が後で問題になるということなど、どういう思いで支援を

捉えているのか。

頼政：つながりといっても多様なつながりがあるかと思います。

清水：話をしてもいいかもしれない。2年間、足湯ボランティアとして現地でコーディネーターをしていた。長い支援が必要だと言われていて、終わりがみえるのかな、と思っていたが、なかなか見えてこなくて、支援する側として先が見えないのがつらいと思った。被災地の人に役立ちたいと思っていたけど、自分の復興を忘れていて、支援ということ自体もつらくなってしまった。支援者のための支援ということも必要なんじゃないかと思いました。

井奥：僕の活動の大本は障害者に有料の介護者を紹介することだけど、有料介護者というのは障害者が社会とつながるために仕事としてつながるという意味合いもある。Beすけっとの活動が震災の2年前から始まっているが、サービスとしては言われたことだけをすればいい、という発想で、当事者の希望を聞いてそれをすればいい、としてきたが、おせっかいでいいと思っています。誰かが誰かの力になりたい。介護保険など制度が整ってきて、障害者も法律で支えられているが、災害時にこぼれる人もいるのも事実。相手に必要とされていないかもしれないけれど、こちらは心配しています、という人間でありたいと思っている。それが支援やボランティアという言葉しかないかもしれないけど、それは常日頃変化しながら相手の要求に合わせていく、支援している人が落ち着いていく過程。気がついたらこちらも変化している、というサイクルがあると思う。今の方法が一番だとも思わないし、後世に変わっていったらいいんじゃないかと思う。

〇〇：僕、福祉の勉強をしていて、福祉系の大学に行っているが、福祉って終わりが無い。最後の一人まで救うつもりでいる。ゴールを決めてしまうとそこで終わってしまう。ゴールがなくていいと思う。主体性の原理という言葉があって、何かをしてやる、してあげるといふ支援ではなく、当事者のニーズ、当事者の主体となって支援していくという考え方。ゴールを設定せずにいく支援は、人と人とが助け合っていく上で絶対事項、外してはいけないことだと思う。

〇〇：僕は支援の負の面があっという。支援の裏側には”give”という言葉が見え隠れをしている。東北で被災した友人がいるが、3.11後、「がんばれ」という言葉がつらいと言っていて、また支援物資が鬱陶しいと言ったりしていた。プレッシャーや期待がつかいと思う人もいる。支援ということに対してモヤモヤしていたら、休んでみたり、見つめ直してみたりしたらいい。



支援は続けなければいけないという考え方の人が多いと思うが、向こうの継続的な求めに応えるのは行政の役割で、支援ということに負い目を感じるならやめてもいいのではないかと思う。

〇〇：反対という訳ではないが、終わりという時間的な見方をするのか。循環的なあり方が必要なのではないか。正当な対価があれば納得する、ということがあれば続けなければいけない、という義務はないのではないか。もらったものに対して自分が果たす義務に加え、支援という言葉に対してはいつになったら終わるんだという、終わりという考え方をすることを問うことが必要なのではないか。

頼政：終わりを設定していくことへの違和感、ということでした。

入福：「支援」が茶色い葉っぱに書かれていることにつながってきたなと思った。これが土に還って栄養になって、という様につながっていく。茶色い葉っぱになっているのが意味があるのかな、と思った。

サン：一人だけでは難しい。他人の力を借りなければいけない。

石塚：支援の話と、何故阪神・淡路大震災の教訓が東北に活かされていないのか、ということがあったが、活かされていないと言うときの主語が曖昧。東北にいる人間からすると、活かされていないのは東北の人間の責任と捉えている人もいる。また過去の経験から「今」が否定されるというのは反発を感じる。そうした感情を持ちながら一緒に考えて動くということを大切にしたいと思っている。

頼政：僕も曖昧な感じで使っていたが、教訓が活かされていないのは東北の人が悪いのではなく、もっと伝えるべきではなかったか、という意味で使っていた。

〇〇：神戸の教訓という言葉について、朗読の時間に地震のことを習う機会があって、東日本大震災の地震が起こった時に真っ先に浮かんだのは阪神・淡路大震災の漫画のワンシーンだった。仙台で地震が起こると言われていて、準備をしていたので、家具が倒れなかったということもある。活かされている部分もあるし、どの部分が活かされていないのかを明確にする必要がある。

上野：僕も同じような疑問を思っていて、阪神・淡路大震災を経験していない者としてインタビューを行なった。どういう印象を持ったか、などを聞いた。阪神・淡路大震災が起こった後、焼き物の町である常滑市では古い煙突が崩れないようにする、という活

動があった。静岡でも震災の対策をする、ということがあった。活かされていることも確実にある中で、阪神・淡路大震災を経験された方はどう感じているのか。

頼政：阪神・淡路大震災を経験された方はどう感じているのか。

村井：神戸の人間として発言したいが、お二方からも意見があったが、活かされたことも多々ある。活かされたことは伝えていけばいいが、伝えられていなかったことで命が失われたこともあるはず。そこにこだわって発信し続ける人も必要なのではないか。入社が決まっていたのに仮設に住んでいるということで採用が取り消されたということもあった。こういうことを次の時に伝えなければいけない。見えないところを見るという姿勢がないと、落ちこぼれている人がいる中でその人たちまで到達できない。そういうことも大切。

なぎ：阪神・淡路大震災を経験した人間です。僕自身、障害者ですけど、障害者で亡くなった人は2倍。東北の場合は、さらに増えている。この実態は、変わらないんです。だから、僕らは阪神・淡路大震災のときに、本当に人のつながりは大事やと言いながら、やってきたつもりでありつつ、つながれていないという現実が厳然とある。僕らの責任でもあるのですが。災害が起きたときに、弱い人をどうするか、と気付くのではなくて、日頃から気付いていない社会がやっぱり問題だと思っている。

頼政：普段からのつながり。また、つながりに戻ってきますがそれが足りないということです。

〇〇：今の、教訓が活かされている、活かされていないという話ですけど。活かされていないということを皆にきちんと理解されていない。阪神・淡路大震災の教訓は、経済優先じゃない安全な社会をつくる、ということだった。なのに、もう一度、経済成長を夢見るということをアベノミクスでやろうとしている。こういうことが、例えば高速道路優先の社会であり、阪神・淡路大震災のときには、都心の中ではもう高速道路はやめようという話だったにも関わらずである。東北で活かされていないんじゃなくて、20年前のわたしたちが経験した人間優先の社会づくりを目指すという方向性が、結局国全体で活かしていない。結局同じ、経済成長をしている。ここのところが、活かされているか活かされていないかの大事な議論のポイントだと思う。何を活かすべきか、もう一度20年目のいま、もう一度共有する必要があると思う。

頼政：手が挙がりましたので、では、後ろの方から。

〇〇：すみません、あまりうまくまとまっていますが。今年で 30 歳。当時 10 歳で西区に住んでいた。最初に見たのは、死者 5 名という報道だったのを覚えている。震災は、一時ではなく、その後、長田の火災や孤独死などがあつた。最初に揺れて怖かったが、それだけでは終わらない、というのが自分の体験。東北の大地震で、揺れは感じなかったけど、30 分後には津波の映像が流れてきて、海岸線を走っていた車が津波に流されていく様子を見た。このままで終わるはずないのにな、とっていたのに。僕が 10 歳のときに感じたことをもっと伝えておいたら、という思いが、今日を通じてこみ上げて来る。伝えていく、ということをして自分がやっていけないといけないと思う。支援というの、目指したい社会のために、色々な人とつながってやりがいを見出しながら続けていけたらいいのかな、と思った。足湯のボランティアをして出口が見えない状況がどんなものか、僕は分からないので簡単には言えないけど、自分の中で何か見出していけたらいいのかなと思う。

〇〇：松本さんの話を聞いて思ったんですけど、具体的な話をしたいと思っている。僕も、阪神・淡路大震災から 20 年経つ、ということで街角でインタビューした。案外そこで多かったのが、ライフラインが止まって困ったということ。震災から、あんまり文明に頼り過ぎない生き方を目指したいと思ったけど、結局 20 年経ってもそれができていない、と言う人が多かった。自然を大事にしますか、と聞いて、します、という人がほとんどと思う。高台移転とか、堤防を造るとか、その是非は置いておいて、自然が大切という理念をどういう行動に移したらいいのか、どうすれば自然を大事にできるのかが分かれば、もう少し具体的に動けるのではないか。ピケティの本も資本主義に対するアンチテーゼというところから出てきたものだと思うし、お金が全てじゃない、というのも分かっているけど、具体的にどういうことを実践していけばいいかは、分からない。

〇〇：私もすごく、松本さんの話を聞いて思った。実際に身近で実践できることと、大きな社会の問題として解決しないといけない、ということが同じ場所で話されていて、いつも混乱する。経済の問題を目の前にぽんと出されても、どうしたらいいの？と思う。私自身も原発の事故があつて、いきなり目の前に原発の是非について突きつけられた。電気とかエネルギーとか、目の前に突きつけられても、帰ったら電車にも乗るし、電気もバンバン使う。この矛盾に対して、どうしたらいいのかが分からない。この矛盾をどうしたらいいのかが分からないから、口にできないし、諦めている部分もあると思う。どうしたらいいのかな、というつぶやきです。

頼政：僕らも、フォーラムを準備するにあたって、生活と社会の問題が繋がらない、というのがあつて、この 20 年をきっかけにそういう話ができたらいいのかな、と思っ

ています。最後に言いたいことのある人はいらっしゃいますか。

〇〇：さっきまず、清水さんを責めてしまった感じになったようでごめんなさい。松本さんの話に共感した。小学4年生のときに被災して、旧友を亡くした。被災者と言う言葉は嫌いだけど、僕の始まりは被災者だとも思っている。小さな災害からも教訓はある。自然災害を防ぐことはできないけど、人命を助けることはできるんじゃないかと思う。「自分ごととして捉える」とモグラの紙に書きましたけど、2度と不必要な悲しみをつくらぬ社会にしてほしいと思っていて、それを僕は教訓にしたい。先ほど原発の話もありましたが、なんでもかんでも二者択一なのか。メディアも通じて、なぜ再稼働が必要なのか、ということに社会全体で共有する努力をしてきたのか。それで、教訓が活かされなかったんじゃないかと思っている。

〇〇：松本さんの経済の話、資本の話で疑問に思ったこと。今、経済資本主義が台頭してきたのはなぜか。今の大人が高度経済成長を頑張っ、創ってきたんじゃないか。公害問題もそういうところから発生してきた。災害から唐突に変換を求められても、この社会を造ったのはあなたたちじゃないか、と思う。全部を否定する訳ではないが、そういう疑問が沸いた。

松本：最後の発言という形でお時間をいただいた。どこのどういうところに終着点を置くのか不安なままやってきた。だけど第一部、第二部、第三部と朝10時からまもなく17時になろうとしているが、すごく素晴らしい議論になっているなどお聞きしていた。ついつい議論に誘われてしゃべってしまったが、現場の中に突っ込んでいって、ある人は賽の河原の石積みのごとく前が見えない、分からないことがいっぱいある中で、「つながり」などのキーワードが出て来た。根っことつながっていないけれど、若い人がイライラしている。

希望が見出せないままに、だけど現実の現場の声がありつつも、先が見えないという状況、それを私たちは20年前に経験をした。当時、新聞記者をしていたが、部分部分を見ていると全体が見えない。担当した部分しか見えない、全体が見えない。幸い、私は全体を見る役割、立場だった。大きな災害というのは、世の中が大きく変化する時。大災害などの後に大きな社会の変化がある。全体を俯瞰して見るという努力をしないと、部分部分だけ見ていると判らない。そうした作業の中では何かを紡ぎ出されている第一部だった。第二部では大人として扱われましたが、20年を体験したかしていないかの違いだけ。第三部ではこれらをまとめていい議論があった。これから1週間を積み重ねていくことで、これまで以上にいいものが生まれると期待している。

〇〇：たくさんのキーワードが紡ぎ出された。これから機会があれば、20年前の木と照らし合わせながら、キーワードは何を意味しているのか、ということを実験でいけば、はっきりしてくるんじゃないか。ここで紡ぎ出されたキーワードは、これからの、震災20年からスタートする社会、そしてまもなく5年目に入る東日本という場面に立つとき、地域、社会、日本をどう変えていくのか、ということにつながるということになると思う。社会のシステムの変革につなげるということが大切ではないか。過去の大災害、関東大震災、敗戦。その後、世の中は劇的に変わってきている。阪神・淡路大震災から20年、東日本から4年。今変えなければ、後世笑われると思う。

もう一つ。最後のところで議論になった「支援」という言葉。今年、去年くらいから室崎先生が色んなところで書いているが、支援する力、だけでなく支援される側の力、両方の力を高めていかなければいけないとおっしゃっている。いつ起こるか判らない災害で、もう一度支援される側に回る。される側に回る時に、これまで支援してきた50数カ国もある。その意味とキーワードがここに隠されているのではないか。振り返れば困った時はおたがい様、という合言葉でCODEが始まったが、新しい言葉ではない。古代から、この世に暮らし始めてから相互扶助、お互いに支えあって生きてきた。阪神・淡路大震災以降、せいぜい半世紀前まで困った時はお互い様でやってきたところが、半世紀で行政に頼る、金さえあればいいというおまかせ社会、依存社会になってきた。そこからもう一度自分たちでできることは自分たちです、できないことは市町村にしてもらおう、市町村でできないことは県に、県でできないことは政府にやらせる、という補完性の原理。そうなるとうまくいかぬ国ができることがなくなる。これが住民自治、市民社会だと思っている。市民が主導し、市民が自律する社会。支援力というのはこうした社会の中でとても重要だと思っている。これから具体的に自然と人間をつなげるというキーワードが出ていたが、まさにここ。自然と人間がどう折り合いをつけるか、地震と津波とどう折り合いをつけるのか、コンクリートで止めるのではなく、どう折り合いをつけて暮らしていくのか、ということ。これが循環社会ということでもある。自分たちが生きていく上で何を变えなければいけないのか。その一種の見取り図、キーワードが紡ぎ出されたと思う。是非いい宣言文を期待したいと思います。

頼政：皆様、ありがとうございます。最初はどうなるかと思っていましたが（笑）。

入福：二世代で分かれて議論してきたが、それがこの場を通して一世代となって、また次の世代へとバトンタッチしていくんだなと感じた。

頼政：ここではキーワードをたくさん出して頂いたので、この20年のメッセージを出していくためにこれを基として創っていきたい。もっと具体的に行動できるものにしないと伝わらないという意見もあったので、是非皆さん、明日は昼の1時から被災地NGO協働センターで議論をします。月曜日から金曜日は夜の7時から議論をしていきたいと思っています。つながりというだけでもあれだけの議論になる。次の世代が行動できるような宣言文にしたいと思っていますので、よろしくお願ひ致します。それをもって来週の日曜日に発表したいと思ひます。